

913.5
マ
前編 3

松浦佐用媛石魂録

前編

三

止

松浦佐用媛石魂録前編下卷

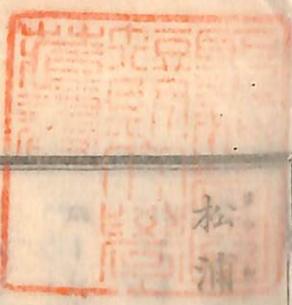
東都

曲亭馬琴編次

第九

龍神洞に孤客命と知る

太宰府の守護。平經高が股肱の家隸。牛淵九郎清繩と云ものありけり。原是何等の人な
 りと。其素姓と尋ぬる。父の岬平馬清麿とて。三浦泰村が譜代の郎黨。忠義無二の者なり
 し。然るに泰村の。後深州帝の御宇。賢治の始め。北條一家の威權を招き。謀反の企ありしこ
 ろ。清麿屢々主と諫。終に用ひられず。却出仕を留められ。かバ平馬の痛くこれと歎
 死。忠臣面と犯して。君と諫るに。其言用ひられず。縦眼睛を東門に掛る。又何の益ありあ
 らん。只身を殺して。君がミづりなせ。袷を褌ひ除ん。いと深念。一封の遺書と寫留
 め。腹かき切。死にけり。清麿が死後。彼遺書を披露。と雖も。泰村終に逆意を思ひ留まる
 氣色なし。まういあれ。其鯁忠と憐れけん。清麿がぬさりの子どもを扶助。恩惠願厚かり



東京金屋目反土

けり。さる程に寶治元年六月五日。泰村儀頃親族を令々軍兵を召集執權時頼朝臣の所へ押寄。勝負と一時決せん。と計較たるが。輝忽地に發覺て。その日の軍利あり。泰村父子主従。幸ひて法華堂に引退た。皆悉く自殺せり。かゝりしうば。岬平馬清藤が子供。冢子の女兒も。次男と淵九郎といふ。年おほ幼た。母も去年の秋身まか。父を此春自殺せ。よるべな孤ある。主家さへ滅亡しつ。謀反人れ餘類取りと。日米親一方も疎き。いと詮術なかりしか。同胞泣々鎌倉と迷ひ出。些の由縁と便りて。攝州尼が崎も。赴き。浦人の奴婢とありて。形おたせと送りた。こゝにおあること十斗あまり。艱難憂苦の中。一人とおまよけるが。淵九郎の稚たより。其志還しく。潛し思ふやう。己が身命運薄く。去り。濟世と扶。斯民間に零落して。人の奴僕とあり。狂人等と掠役せらる。と雖も。父の泰村ぬ。これ忠臣たり。加藤三浦岬の元親族より。外様の家隸と同ぐからず。されば。己れいかもして。鎌倉と政滅。亡君の仇報い。と思ひ定め。おがら。姉の心中の機密を。とせむ。ある日同胞。人おた處に集合て。行末来しか。この事を語り。はるくる序。淵九郎が云

やう。姉御の年も。己れおの十あまり増。おのまれば。昔鎌倉おありける日。此景も。とさ。託て。おのまらめ。己が身の何事も。夢のやうお。父母の面かげさへ。定々おの認り候。いひど。さしも三浦の忠臣と呼ま。さる人の子と。沙風お吹く。徒お浦曲の持と事。として。生涯と過さん。最朽とし。西國の菊池原田など。名だるる武士も。多ければ。同胞諸共に。彼地お赴た。縁とも。とめ。主どりせ。やと思ふ。あり。思ひさち給へ。うし。と云。お。姉も。年米淵九郎が。志大おして。もの。と用。に。とつ。べき。者。なり。と見。け。れば。とも。かく。も。よ。お。お。計。ら。ひ。給。へ。と。應。か。バ。淵九郎大お歡。び。主人。よ。の。故。郷。へ。立。歸。り。親。族。に。對。面。し。て。父母の墓へ。詣。て。後。お。又。歸。り。来。べき。よし。とい。ひ。お。し。ら。へ。お。む。し。身。の。暇。と。給。は。る。べ。し。と。云。お。主人。聞。く。彼。等。の。年。米。信。や。う。に。仕。さ。る。もの。お。れ。ば。と。て。心。よ。く。是。を。放。し。東。へ。の。道。も。た。る。け。し。是。も。て。ゆ。お。ね。と。て。路。費。よ。お。程。に。と。ら。す。る。お。が。同胞。い。よ。く。歡。び。聞。え。と。遂。お。尼。が。崎。を。旅。ぢ。東。へ。の。赴。す。して。只。顧。西。と。斥。て。ゆ。く。程。よ。日。と。經。る。長。門。なる。赤。間。が。関。まで。来。り。け。り。さて。此。津。より。便。船。お。り。豊。前。の。小。倉。へ。渡。ら。ん。とし。は。る。夕。忽。地。姉。と。見。失。ひ。と。大。き。に。驚。

た。彼此と索めぐりて。其日、遂に舟に乗らず。次の日も。又浦曲小浴て。竹崎室津。畑住新五
宇加。瀧口。神田。阿川の湊々。と索呻吟。是首彼首。二三日を費せと雖も。絶く姉に疎會す。
ここに至く。瀧九郎。大に後悔し。己れ不幸ふして。尤やく父母を喪ひ。姉の養育と受く。其
恩父母。異なる。あらず。あつると。青雲の志。己難くて。遠く西海に漂流し。思ひの外に同胞離
散して。姉の往方と知ず。かゝれば。再會も。又計難し。縦一旦。志と得く。蘇張が列國の印と
帶るの日ありとも。姉の高恩と謝する事と得ず。益なれは似たり。よくなや。住かれざる
津國と。漫に迷ひ出さればこそ。亦一層の憂苦とませ。只此上。神明佛陀の冥助と禱るに
非ず。姉の往方と知難うるべしと。此日より。道次ふと。し給ふ。大小の神社へ。必らず
詣で。祈念を凝らしつ。隈川のおおと。向と云所。長やうに。海へさし臨たる出崎なり。此
己さりに。龍神の洞と云あり。又龍燈の松として。最ぬりたる松ありけり。渡海の船も。風濤の
難ふあふ時。かの洞に祈に。必らず。應驗あるよし。浦人の物語に。瀧九郎不圖聞。聽
く。件の洞に參詣し。祈願する事前の如く。殊更に丹誠と凝らしけるに。頃しも三月の下旬。あ

れば。海上日和。あづらふして。風景えもいれず。長途の疲勞に。思ひをも。彼龍燈の松が林
と枕として。あべし。目睡さる枕邊に人ありて。瀧九郎と云と。呼び覺を醒せし。う。やとら
頭と擡げ。見うへれば。白髮童顏の翁。端然と。傍な。巖に尻をかけてあり。被さる衣の
海松の如く。かき垂されど。其文も。未だ見も馴ざる。錦袴の類。や。光曜くと。魚の鱗め。た
る。手もさる杖。米よりも赤くて。珊瑚。お彷彿たり。瀧九郎深く怪し。み。この翁。凡人
から。と。思ひし。う。岸破と身と起して。其好とり。一。躡踏し。つ。翁。熱と。瀧九郎と。視。云。や
う。壯俊。汝の志。大い。かれども。惜らく。命運。甚薄し。え。志を。轉。名利と。素泥
中。尾と。曳ん。よ。齡。百歳の上。壽と。保ち。人の爲。尊敬せし。るべし。又。宿志と。轉。得。す
し。頻。暴慢と。放。し。名利。兩。お。懸念。せ。其。事成。ざるの。と。あ。ら。で。年。四十。と。越。難。か
らん。と。まれ。か。く。まれ。今。より。廿。年。と。經。始。めて。姉。あ。あ。時。あり。己。れ。見。る。所。ある。と。も。て。汝
は。一。卷。の。秘書。を。傳授。す。べし。汝。が。才。と。も。熱。讀。み。天文。地理。卜筮。觀。相。の。更。なり。兵。家。の。大
事を。開。悟。し。又。間。諱。の。奇。術。が。得。つ。べ。た。あり。只。其。業。成。就。を。と。雖。も。これ。と。用。る。所。あり。僅。し

龍神洞
清繩異人
あふ



龍燈松

牛洞九郎清繩



賣下して。一己の口と餬ふに足るのミ強く其術と放して。夙志と遂んと致す時の身を亡
 走も又其術はあり。劣思ひ慎く。己が教は情をせむ。と説示し。聽て傳より。一卷の秘書と
 とり出で通與せしかば。淵九郎深く歡びて。數回押戴た。其計らすも。かゝる賜と受候は
 おでう等閑は思ひ候べた。願くは己が師。明白は名氏をあらし給へらうと云ふ。翁微笑て
 己れの名もなく家もおし。汝が先祖は因あるともて。言こゝに及ぶのミ。といひも終らす。白
 波高く磯と洗ふて。發と群とつ水鳥と共に。翁の怨地金光と放ち。打うへを浪と踏で。往方
 もあれをなりにた。淵九郎の忙然と。あむし其方と目送つ。己れもあらず。ついあさる。
 時は海上浪おさまりて。夕陽西は没んどは。其時淵九郎の。小膝を磯と拍。げは思ひ出せし
 ことおそあれ。己が曾祖は。三浦分義明の庶子なりしが。其母ある日岬の磯邊は遊び
 感ずる事あり。終は有身て。産する子の腹下に鱗ありしう。是必ず龍神の子ならんとて。
 岬龍村と名づけたるよし姉の物語にてありぬ。然るは彼翁其名と問れ。汝が先祖は因
 ありと答さる。疑ふべくもあらぬ。龍神なり。己れうく向後の吉凶と示され。いよと命運

の薄衣を去りながら。おは大事と思ひ企るとも。頼もいからず。己なんくとひとりごち
 て。遂に夙志と轉し。只世は安らに送らんと思索一つ。直に九州は遊歴去て。潜し件の秘書
 を熟讀し。やゝ發明する所ありて。天文地理卜筮祝相。軍學の奥旨。問諜の奇術とよくはと
 雖も。龍神の教と守りて。一さびもその術と施さず。ゆたかて。筑紫の太宰府に到り。岬淵
 九郎を更て。牛淵九郎清繩と名告り。賣下して生活と走る。其卜所。露ばかりも達ざり
 しかば。諸人深く尊信して。今の世は指の神子なりと稱讚を。然れども清繩の謝儀を受るこ
 と。僅は十錢と定めて。其餘を食らす。只管清貧を樂ま。こゝにある事廿年に及び。太
 宰の經高謀反の企あるより。をべて一藝ある者と扶持をる。清繩が事とよくありて。
 頻は是と招けども。牛淵九郎の深く推辭て。招たは應ぜざるを。經高は禮儀と厚くして。其
 使節三度お及びしかば。牛淵九郎脱るゝに言語なく。とさまかうさま思ひとゆさひ。が年
 未筑紫はありて。世渡をなる。威徳ある人お招れて。一度も行。これと謝せず。却失敬
 の罪と責らるべしと思ひて。聽て城中に赴き。經高が老臣に就て。日米の恩惠淺うらざるよ

一を聞へあぐるに。經高の牛淵九郎が来れり。と聞て大に歡び。是りぬく城中に留る事三日。さまざまの餐應さ。老臣更るぐに。利害と説まげて守護の渴望に應給へ。斯てもあは推辭給ひ。生涯此城中より外へ。出さずと云ふ。清繩は斯町寧なるに心よく覺る。己と得ず。あぶく。主君と頼を奉るべしと應たり。さる程に經高の牛淵を後廳に呼び入る。對面し。見參の引出物として。鎧一領太刀一振。鞍おさる馬一疋を賜て。てづらう。盃とあげ。餐應初めに彌増より。其時清繩は。はくぐと經高が相をるふ。謀反の氣あらわれ。えうも事と遂べき人。あらざれば。意の中大に驚れ。只管後悔をとり。うと既其招に應じて。言下には是を違背せば。忽地は罪せらるゝのミあらず。死後おほ胡應なるべし。これ思はずも。范増と恨と等くをる事よ。と嗟嘆して。命運の係る所。今にかうと思ひ諦め。遂に志と傾く。任しが。經高果え。いく程もなく謀反と起し。清繩をもて軍師とを。されば清繩の機に臨。變に應じ。屢々謀と述る。經高の其人となり。識量狭く。人疑と決斷なれば。其謀を用ひず。清繩大に焦燥て。手勢僅に二三百人と將て。肥後國に押渡り。菊池原田と攻

靡し。肥前の飛蘭渡ふ。紀して。勢を九州に振へり。然るに。北條上總が實政。執權時宗朝臣の命と裏て。鎌倉と進發し。船路より肥前國に赴き。矢田の津に陣と布。直に清繩を討んとす。清繩縁由と聞て。實政の軍配。侮難く思ひ。か。徧々えく進を戦を。兩陣巨海を隔つ。疾視あふて。徒に日と過し。え。其年も暮て。新玉の春立ち。へり。ゆれど。寒さ。牙まきりて。雪降續たされば。敵も身方も。最徒然不堪也。此時瀬川来女吉次の。大將實政は。密語て。へり。たるに。反間牛淵九郎清繩は。不測に問謀の術と得たりと云ふ。彼去年より一たびも。寄せ来ざるに。必定別に謀あるぬるべし。常言に。芭外の犬は。お防べし。壁隙の風は。乘がさしといへり。牛淵尙潛入る。不虞の事あらば。臍と噬とも及む。大將の。今宵より。某と臥房と換へ。睡給へ。幸に子密が。便室の禍を脱し給ふべし。ものをと。信どちていふ。實政聞て。去り尋思し。示さるゝ所理あれど。初め備を。はくくるもの。を。お好不仁あり。といわむ。然るを。わが身の厄難と。避んとて。人と危た。代を。お事。勇士の。せざる所なり。と。四答て。承引氣色。あうり。か。吉次重ひて。然らば。近曾陣中に。罪ある者の。死刑。放し。是

ともてかいら給へ。かくする時。其人牛淵が爲ふ命を預るるも。恨あつるべし。も
幸よして。敵の刃と腕なば。九死と出く一生と得。あかく自の罪と贖ふ足らん。まげてあ
計らひ給へうと云ふ。實政やうやく諾あひて。近曾令と犯して。其罪。死に當る者の年紀
貌粗大將は肖たるを擇み出して。其罪と放し。密やうは輝の趣とあらする。其もの歡で命
と稟。毎夜は。大將は代々。其臥房は。睡りつ。吉次又壯士二十三人を。帷幕の中は。伏て牛淵も
忍び入らば。引裏と討取べきよを聞え知。其身は。出居の方。少し引入る處は。直寝して。
通宵睡らす。實政又士卒は。下知して。毎夜は。符を焚し。ミづうら。四隅とうち巡りて。用心極
て堅固なり。さる程。牛淵九郎清繩は。去年より。飛龍渡ありおがら。實政の大軍。北ま
己が衆は。十が二三ふて。勢ひ當り難く。覺しう。敵の寄ざるを。僥倖ふして。一とびも。動ら
つくづくと思ふやう。これ其始め。經高は。職されて。龍神の教誡。不悖。遂に。五斗米の爲。小腰を
折るの。さちらむ。此度の。大事。ふ與りて。百戰百勝の。奇計を。述る。經高。暗愚。ふして。絶て。用
ひむ。これに。彼人。譜代。恩顧。此家。隸も。あらねど。とても。かくても。死を。べた。身なり。せめて。北

條の親族とる。實政と撃とつて。古主。泰村。朝臣の。冤魂を。慰め奉らば。初先の。志を。遂る。一
。且。經高。ぬいの。謀反と。起せし。を。懲なり。己が。實政と。撃の。義あり。所詮。廣場の。戦。せ。寡を
もて。衆。敵。難し。只。夜。は。紛。ま。潜。入り。實政が。首を。引。捉。走。り。歸。らん。者。と。深。念。し。腹
心の。兵士に。機密と。聞え。知。して。陣中を。守。ら。し。頃。も。正月。廿八日。の。烏。夜。に。第。ま。つ。雪。乃。降。ら
ら。清繩は。最。身。輕。く。打。扮。只。一。人。小。舟。よ。う。ち。乘。り。矢。田。乃。湊。ま。か。渡。り。て。小。夜。深。る。比。及
。實政。乃。陣。小。潛。寄。れ。ば。雪。の。ま。ま。く。降。る。程。小。番。次。乃。兵。士。も。お。乃。づ。う。ら。懈。り。て。所。々。小
集合。つ。最。末。め。や。う。ち。相。語。辨。乃。を。清繩。も。元。米。間。諜。乃。術。小。長。され。ば。鹿。垣。と。跳。踰。
。轅。門。を。過。り。て。斬。く。與。深。く。忍。び。入。り。つ。遂。に。大。將。實。政。乃。臥。房。小。到。り。忽。地。小。其。首。と。か。死。落
。頭。髻。か。い。廻。て。走。り。出。る。小。帷。幕。乃。中。なる。壯。士。も。頻。小。睡。を。催。して。是。と。知。す。只。瀬。川。吉。次
。乃。睡。魔。を。退。け。孤。燈。乃。下。小。史。記。乃。刺。客。傳。と。聞。いて。居。さ。り。ける。小。忽。此。癖。者。あり。て。假。實。政
。乃。首。引。捉。外。面。へ。走。り。去。る。と。吉。次。倍。と。見。る。を。い。や。牛。淵。ご。ご。な。れ。と。叫。び。も。あ。へ。ず。幕。直。小
。飛。り。り。て。盃。子。鐵。入。たる。頭。巾。乃。鉾。を。無。手。と。とり。て。引。う。へ。さん。と。を。る。小。豫。う。忍。緒。と。放。む

世川采女
瀬川采女
夜半
追ふ



月洞清繩



死さるよや。仰さほふ引外して。頭巾を吉次が手に残り。清繩はえや。鹿垣小走り登まは吉次
 大に焦燥て。太刀ふ著さる小刀を脱出し。追ひつ、丁と打かくると清繩を物ともせざして。
 是と袖ふ受留。やとら垣を踏こえて脱出さり。こ乃群響ふ宿寢乃壯士番次乃兵士驚死
 駭て。手ふく器械をとつ。追蒐んと聞くと。吉次見うへりて牛淵とバ。己れ追留て撃とる
 べし。かのくはえやく路を斷ふとぞて。這奴は飛蘭渡へ歸さざれやうに。手配去給へとい
 ひうけて。角門と押開死。飛が如くに追くゆく。大將實政縁由と聞て。尋て謀つる事をなれば。
 俄頃ふ軍兵三手に己け。其一手の清繩が歸るべた路と遮り留さし。又一手の兵士の残し
 留めて。陣中と守らし。残る一手の軍兵と將と直に飛蘭渡へ押ささり。清繩が陣を攻破り其
 包を抜んとて。馬に閃りとうち跨。鞭は鳴らし。深雪と路。抱ふ搦て走出まば。主に劣らぬ
 壯士ども。ミな後まどと引添たり。斯て瀬川采女吉次の頻りに牛淵清繩と追蒐く。や、間近
 くなる程に。牛淵の疎林の中へ走り入りて。忽地見へずぬりしうば。吉次ままく。焦燥く雪
 に叩さる足跡を示ふし。おほ何處までもと追蒐たり。さても牛淵九郎清繩は。輒く實政と撃

とりぬ。と思ひいかば。敢戦と好まむ足信一と脱走り。あまりに烈しく追ましくむ。彼と
 違過さむやと思ひて。道もなれ山路に向ひて。徒に足跡と残し。逃逃して立戻り。道と横さ
 まに。徑にかゝる。踏さる雪を掻埋めは。漸くに吉次と出抜て。直に飛蘭渡へ歸らんとす
 る。實政の軍兵、ゆく先は充満く。遂に歸る事と得ず。夜のほのくくと明あさりて。沖の方
 と信と見れば。飛蘭渡の陣も。えや攻落されぬとおぼしくて。水鳥影。こかたを投して飛来る
 ほど。清繩大に疑惑ひ。躊躇して思ふやう。實政の軍監は。瀬川采女吉次と呼る、もの。年
 弱々れど。智兼尋常に非を。軍慮孫吳武學ぶと聞し。果して敵の備あり。も一。大將實政は。撃
 れららば。陣中以外の外に。騷動をべた。却て。歸る路と遮り留め。主將のなれと知く。飛蘭
 渡と攻落したる軍記。甚奇なり。然れば。此首も。實政のありて。廢物はありけるうとて。は
 らく見るに。枯首ぬれど。其骨相匹夫の面影ふあ。大將の首級ふ非ず。さては。謀策られさ
 る朽とさよ。とひとりごちて。蹠をれども其うひさし。こ、よ至つ。いよ、龍神の教誡
 露むうり。え錯さると感嘆し。嗚呼。己れこゝに死んう。といつ。余さる首と雪中に。撲地と投

捨。又道ととつてかへ。末の龍華の方へ走りけり

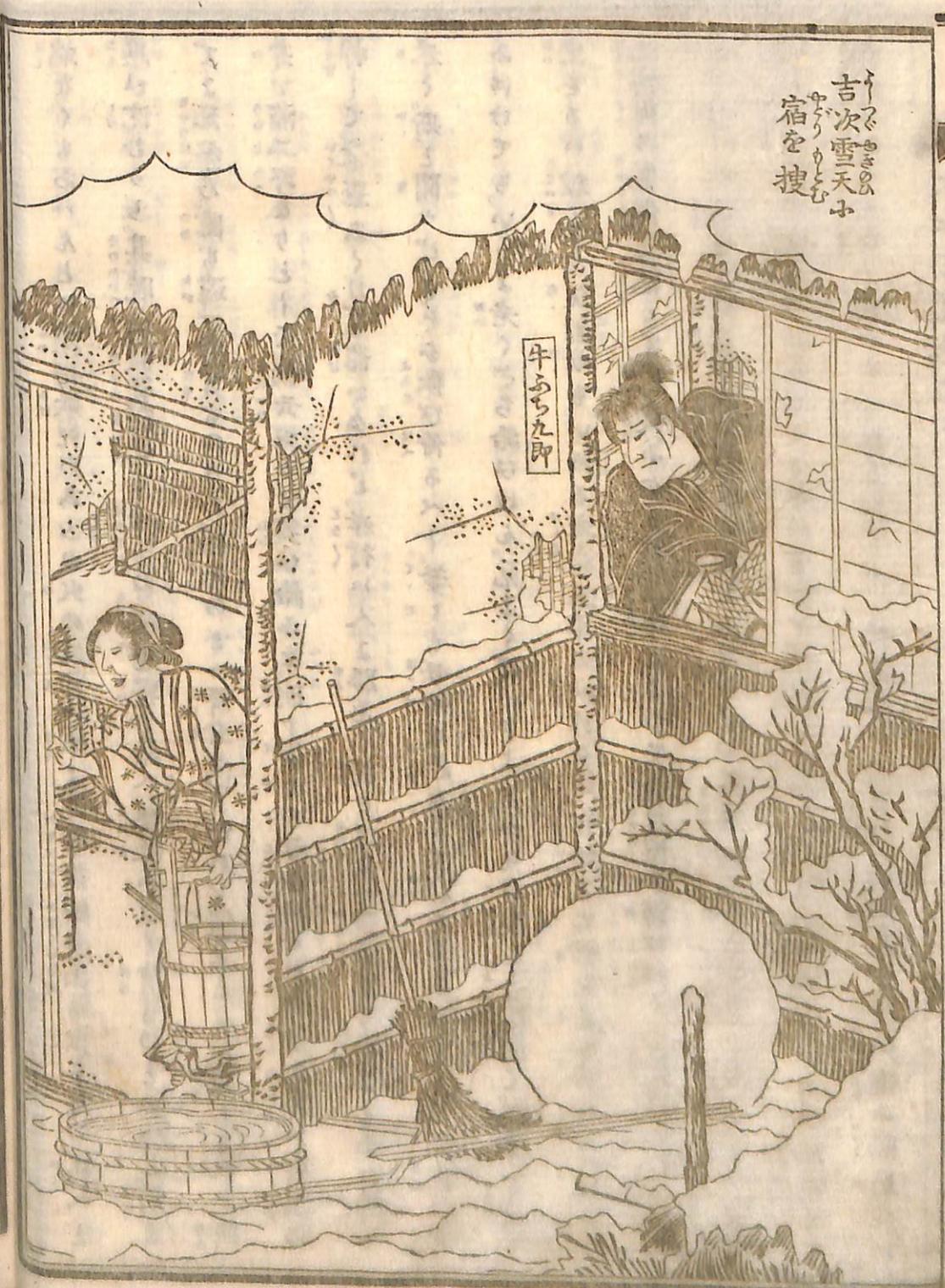
第十 末龍華の親族全く聚る

明きば正月廿九日の早天。北條上總公實政。瀬川采女が謀ふよつ。牛淵が飛蘭渡の屯と擊崩し討とる所の首級と秋梟。さう暗号の蜂影もて。矢田の身方へ知りけり。かこりしうらんとて。おは彼此と徘徊する。野も山も白妙の深雪の外物もなく。斥て行方も覺束取くて。不意も末の龍華も迷ひ出たり。通宵走りたるに。痛く餓て寒堪難ければ。道次ある草舎ふ立寄。斜なる片折戸とほとくと打敲ふ。裡より老女の聲して。誰と問。吉次答へ。是の深雪は道を迷ひて。餓に臨る者なり。あべい慰して。一碗の糍を恵み給へ。翌日必ずす。厚く報ひまべたふと云を。件の老女聞もあへず。阿々どうち笑ひ。あふ己が子。えや歸りたる歟。いつまで童めたさる正な事して老る親と誑れ遊ぶ。疾々裡へ入れりし。と云。吉次の其心と得ず否これ。近曾東より采れる者なり。そねとこそ。正な事いへ。これい

でり人と誑くべた。と吹けば。老女いままうち笑ひて。汝の叔父も勸んとて。酒を買出さる。人ふも進で。まづ痛く酔さる。あふ飽ま。や。年采耳なれさる。己が子の聲と聞候つものう。開よとぬらば。あどて明白に聞えさる。此雪に寒けく。あふた。嗚呼の白徒さといひ懲らしつ。荒さる庭も揺捨さる。雪の中道を。木履穿あめて。歩み出や。折戸と開かけ。吉次と見か。う見つ。怪しや。聲も面影も。紛ふべくもあらぬ。己が子なれど。身は腹巻と。小手脇當えつる。武者態の最勇さ。よ。此曉。飛蘭渡に戦ありと聞さる。若武者の物比具と。剣とりて。や采さる。心ある人。道も違さる。さへ拾ひを。然ると。彼人の後卒と。知れから。引剣をる。即ち獸の心なり。とくもてゆきて。其主へ返さす。得こそ。裡へ入ま。とて。涙さし。ぐと忍すれば。吉次まま。果。こ。狂人ありと。猜して。争す。微笑て。云や。老女聞け。せよ。似さる人。影あり。神の代。よ。天稚日子の。阿遲志貴の神に似さる人の代。ふ。して。武内宿禰乃。壹岐直に似さるある。孔子乃。陽虎に似さる。何尚之と。顔延之。が。似さる。他人乃。猴似と。云も。是より出たり。己れ。誰に似さる。う。知ねど。東軍乃。軍監。瀬川

采女吉次と呼る、者なり。今曉敵將牛淵九郎清繩と追ふて。途ふ是と見失ひ。漫ふこ、へ
采れるなり。志むし懣して。濡る衣をも乾せよう。大將軍に聞えあげて。十二分の報とま
べ。いうよ心と得たりと云ふ。老女の再び吉次を。と見かう見く。げと思ひ違へたり。東軍
乃軍監瀬川氏と宣ひまれば。何とやらん心ゆくし。え瀬川健三道孝と云人の子。乳名松
太郎と呼れたるふに非ずや。と問と。吉次聞もあへず。己れろの健三道孝乃冢子。松太郎と呼
きたるも乃なり。さて御身の實母。玉嶋ふく在せし。己れこそ其玉嶋なれ。こい。計
らざる再會ぬりと。互に手ふ手とりあふて。母の水江乃浦島が子乃歸りし心持。子に又
宋乃宋壽昌が母ふあひぬる歡びよて。恩愛氣色よあらわれたり。其時玉嶋の袂に袂は纏う
ひし。目水を屢々押拭ひ。定に親子乃因縁端む。命あり春有りて。斯環會喜しきよ。己が身む
う。浦二郎と共に。此州に残りたる縁由の夢々乃物語よて。よく知て坐をべた。離別乃
後も一度も。絶音づれ聞えざりし。正室木綿妙どの、爲端を信を世の中の。義理こうい
と。苦しけれ。されば此顯身の。息に内ふにあふよしの。あらざりけりと思ふ思ひきや。々ふ

端なくもあんと。深に歎たにあらぬ火の鏡紫の果より薪樵。鎌倉山と出る月の。面へと
思ひ沈むら。其曉の寢覺寢覺て。廿年の。頭を察し給へ。雙生によく宵ものといへど。斯ま
て。兄弟乃露も違ひて宵ものうぬ。面影の。み。聲音まで何れと何と。己れ難し。されむ御
身と浦二郎なりとして。物云つると笑ひ給ふな。同く夢の子ふのあれど。浦二郎の野山の
拵して。最寢去く見る影をたれど。孝行の人。勝。弱き者よ。最稀なり。今もあれ歸り
来。斯と聞らば。さそを歡び侍るべ。夢も母御も恙なく在るふこそ。己が年波の寄
ふはけても。いうよ老くごち給ひけん。見まく。ほ。さよ。とかた口説む吉次聞て。何事も知て
坐をるの理なり。父も母も。いぬる文永五年の秋れ。他。打續きて世を去り給ひ。其幸に。
北條殿の寵偶を蒙りて。近従ふゆされ。主命よよつて。近曾博多彌四郎が女兒。秋布と云少
女と娶りつ。然るは太宰の經高謀反の聞えあるふよつて。某軍監。擇出され。去年より矢
田の。紀。あり。總角のむう。より母の事第が事。思ひ忘る。隙のな。夕。己が父物堅くて。
音耗せんよも許し給はず。父世ふぬくなり給ひても。身の務に違なく。海山遠。隔居れば。



吉次雪天小
宿を捜

牛ふち九郎

思ふのみふて意お任せむ。此度不意當國へ来つるこそ幸なれ。逆徒誅伏の後、此便宜と
 もて必ず尋進せ。母も弟も、鎌倉へ將歸るべう思ひとるよ。天已が誠心を憐みて、仇と追
 夫婦が身はうりて。えやいくむく此年を經ると。初めて知て、いと哀悼堪ざりしが、忍
 地に云やう。あおこれおがらけうらすや。あまりに喜いと哀にうち終きて。内よご
 に伴ざりし。通宵路を走り給ひぬ。餓も疲勞もお給ひけぬ。まづ足と洗給へうし。といひう
 けて。忙しく庖福の方へ走り入り。鹽一桶の湯を汲入れ。此ともく出く料木なる竹林の
 ほとりにさしおかけ。吉次を押し立て。椀頬に尻をかけ。雪に氷りて固やうある。草鞋の紐と
 解折しも、紙窓と細やうに押開て。潛一張ふ者ありけり。是即ち牛淵九郎清繩なり。清繩驚
 吉次は追ま。飛龍渡へさへ歸り得ず。進退究て。玉島が家へ宿かり。瀬川は先ごちて。お
 くほりたる處はあり。とも知ずして吉次の。目今足と洗んどしはく。鹽ようつる面影と。信と
 見て刀に手をかけ。さて敵將牛淵も此處はありけるよ。といひせも果す玉島が。鹽とざぶ

とうち復せむ。彼處はもま窓の障子と内より襪と引とてさり。氣色と見せと玉島の心
 よもなれ笑ひは終らし。寔に親子の水入らず。今の湯はあまりに熱し。さけ汲りて進らせ
 ん。といひつゝ桶と引提ぐ。立んとをるを吉次の。忙しく押留め。否湯は欲あう候ぬ。雪よ
 細りし。算の水こそ。潔けきと。さしよせ。鹽に受る。浴浪の水ならぬ。に。ご足と。洗ふ折
 しも浦二郎の。拂もあへぬ。雪の簑の下に。臥と擣て。歸り来つゝ。と見入るゝに。又ひとり此
 宿ありて。裡の容子の。平あらぬを。不審と。左右あくる。走りも入らむ。折戸の。陰に立在て。あ
 し。閑窺居たりける。斯て吉次の。母に誘引きて。地炕の。ほとりに對ひ坐し。さて云やう。年来の
 志願を遂ぐ。かく環會進せされど。親子と雖も。おのゝ。其志所あり。國の爲御身の爲
 に候へば。疾々出し給へと云。玉島聞て。小首と傾け。この心も得ぬ事と聞え給ふら。疾々出
 せといひ。その何を。といひも果ざるに。吉次の。腰に著る。牛淵が。鉦頭巾と取出し。某が所望
 の一種の。即ち此頭巾の主なり。知て留め給ひし歟。又知て宿賃給ひしう。何のあれ朝敵。繼
 高が。軍師とる。牛淵九郎清繩を。舍藏給ひて。浦二郎が。上もよほし。からず。親子兄弟の。義の

私なり。絆よりての第も。繩をかけざれば。吉次が軍監を承りたるうひも。不忠の人となりぬべし。とても腕まぬ天罰の。其首桶の。頭巾の孟子形。首受とらして給われ。ときし出まよ玉嶋の。手にだよとらす冷咲ひ。この思ひもかけぬ己が子の難題。御身より外の己が家よ。いお留ぬとあらがひ給ふとも。鹽ようつをし水鏡。楚と認る所望の首級。おほえらぎとぬくものし給ひぬ。興へ踏こみ搦捕べし。いかにやいかに。と結よまれば。母のどかくの反答なく。あお寒や。とひとりごち。折焚柴のふいめどつ。吉次焦燥く刀引提つと立んとま折しも。やよ待給へ兄君と呼び留はく。浦二郎の物蔭よりあらわれ出。兼笠搦遣り捨く。慌しく裡入り。聽く吉次お對ひ云やう。幼少時に別き奉りし。兄上お在るよし。只今彼處に竊聞して知り。理ある頭巾の首桶。此一歌の酒は易く。浦二郎は給ひらば。喜び思ふ所あり。と迷終つ。歌を兄よさしよすれば。吉次見く大に怒り。謂なれ弟が截断。兄を侮る歌の狂水。清繩が首よ易よとい。いよく不審。思ふに。汝も經高よ心をよして。此條殿は寇すると覺し。忠義よの骨肉をも。思ひ易るの武士の常なり。絆よりての第といひさす。疾

く立と罵りて。歌と把り投着れば。酒ふのあらで。裡より出る。吉次が小刀と。浦二郎搦とつて。再び兄が不とりにさしおた。いうは兄上見給へりや。頭巾に易る此小刀の。己が幼少時。父の像見とて遣し給へる。此短刀と一對なり。御身牛淵が頭巾ととり給へば。牛淵又御身の小刀をとれり。然れば是送し差あり。只浦二郎が申をに任して。彼ともて是に易。まじ見放し給ふとも。敢忠義乃虧損に非ず。承引給へりし。といひせも果す。吉次頭とうち押す。やをれ浦二郎。只一つ乃小刀と惜み。進詰る牛淵と放まべた。理おし。無益乃勸解聞に及ばす。いで討とらん。といたまきて。席路反して興乃方へ。走り入らんとすれば。玉嶋職てこの間己おあし。と引袖と。ふり拂へば又とり搦る。浦二郎を撲地と突退て。岸破と隙間く蒸機と小楯とり。牛淵九郎清繩。刀を引提て立塞り。健氣なり。瀬川采女。己れ經高が爲乃に。犬馬乃勞を竭まふ非ず。此條一家の。古主三浦泰村主乃仇なり。あまともて九州に跋渉して。頼大將實政と。撃得たりと。思ひ乃外却。汝は計られて。不覺ととりたるこそ。朽としけを。今汝が首ともて。今朝討したる兵士乃。冤魂と祀らすの。何乃時と期すべた。とわざたよわざた

瀬川龍幸に
牛淵と
戦ふ



牛淵九郎

十五

世川三郎



と尋思しめん。習得あらいえする間諜しのびの術じゆつともく、輒たやすく撃課うちおぼせたり。と思おもひの外ほか、却かへつて大しつやつや飛龍ひりゅう渡わたの舟ふねをさへ責敗せめやぶられ、既すでに進退しんたい究きゆうる。あゝ小腕のがき来て討はかずも、姉あね玉たま島しま小環せうわん會あひ。瀬川せがわ健三けんざうが事こと。又また其その子供こどもの事ことと聞きて、思おもひあはする小さ寶たから政まさが軍監ぐんかん。瀬川せがわ采女さいにょ吉次きちじの己おのが姪おひなる事ことと知し覺かくし。とても死しまべた清繩せいじゆが首かうべと、彼かの吉次きちじよりとらせんものと。浦うら小浦せうら二郎にらうと思おもふ程ほどを告つげ、采女さいにょが打うちかけたる小刀こがたなともとし、矢田やたの方かたへ違ちがつたるよ。絆こたづ終つひは相違さういして、養育やしよくの恩おんの親おやも勝まさる姉あねの自害じがいもこれ故ゆゑと。思おもへばいと罪深つみふかた。身みの惡業あくごうに悔くひて、かへらす。清繩せいじゆ撃うちれりと聞きえなば、經高つねたかが滅ほろん事こと。踵かかとをめぐらすべからず。疾々さくさく撃うちて高名こうなせよと。頂たうさし伸のべ合掌がつしやうす吉次きちじの初はじめて縁由えんゆと知してまま、嗟嘆さたん、幼いた時とき二親ふたおやの物語ものがたりも聞きけ事ことあり。己おのが寶母たからぼの其初そのはじめ、領巾ひれ魔嶺まねの麓ふもとなる濱はま添ぞひ何なにが、炊ひ妻つまなるが人肉ひとにく經紀きんぎは拐かど撃うちまゝ。彼かの此この小呻吟せうしん。主人しゆじんの憐愍あはれみを得え、其家そのいへにありけるを。己おのが父母ふぼ、鏡かがみの神かみは示現しげんよつて、側室そばむろと一ひと孀あはを産うまへとぞ。さて赤間あかま関せきふて、惡棍わるそのふ奪うばひ去さられ。思おもはず離散りさんし給たまひたる。同胞どうぱう母子ぼし羊やうと經へる。環會わんわいぬるうひもぬく。名告なれば互たがひに讐敵あだたき。よしや忠義ちゆうぎに立たつとも。母はは杖ぼう喪しやうひ叔おぢと撃うちて、官

位俸ゐほう禄りくも何なにうせん。苦くるくたもの武士ぶしの名なのまご後の詳しょうなる。と身みと悔くひて撃うちかねたり牛瀧うし聞きて聲こゑをふり立たて。この女々めめ、瀬川せがわ采女さいにょ。清繩せいじゆを撃うち漏もろして、後の軍功ぐんこうも徒ただならん。忠義ちゆうぎもす道みちやある浦うら二郎にらうも諸共もろともに。これと撃うちて反逆はんぎやくの餘類あまを脱だき。兄あに吉次きちじも從したがひ。鎌倉かまくら殿どのの御感ごかんふあづられ。あどて刃やいばと當あて殺ころす。といひ勵はげせ。浦うら二郎にらうの臉まへとあはたさた。死しのともあれ某それがしの未いまだ仕つかへざる其そのうひ。叔おぢと撃うちべた義理ぎりもあし。此事このことのまじ許ゆるし給たまへと。承引うけひ氣け色しきなかりしかど。牛瀧うし大おほ焦燥せうそう。彼かれも是これもいひがひあ。恩愛おんあいの已難やむがたくて。己おのが姉あね自害じがい給たまへども。清繩せいじゆと撃うちす。其その死しも又またかひなれ不似ふにたり。いざさらば。牛瀧うし九郎くらうが刀やいばの切きあぢ試こん。といひもあへず。これと己おのが腹はらへぐさと突つたつる折をりも門方かどより人ひとありて。吹ふきさむ笛ふえの音ね。さあがら龍りゆうの吟げんする如ごとく。怪あやしかり。清繩せいじゆが痰口たんぐちより。一道いまだうの雲くも鼓つづみと立た升のぼり。又また霏あられ々とと降ふる雪ゆき。遂つひに碎くだれ玉たまの屑くず。或あるは神龍しんりゆうの空くう宙ちゆうに戦たたかひ。鱗うろこと散ちま。具もならず親おや子こ同胞どうぱう諸共もろともに。ふりさけ見みれば茅屋ちやうやの擔のの雲くもの篋はたて手てに目めをかけて。吉次きちじ兄弟けいだいつと立たあがり。傳つたへ聞き岬さか龍りゆう村むらの龍神りゆうじんの子こなるともて。其その子孫しそん今いまに至いたつ。腹はら下に黒子くろこあり。形かたち鱗うろこに似にたりと



や。今清繩の痰口より。雲氣立沖の。方に是。祖先の血脈とあらにをももの敷。あま奇なるも
 奇かりたりと。瞬もせむうち睡れば。母の苦しむ息の下に。弟と子ども見うへりて。己が身
 むらう赤間関ふて。人内經紀ふ拐撃され。速く此肥の州ふ呻吟て。演添の焚妻とあり。始め
 より。秦村ぬいの残黨なれば。健三どの夫婦にまら。親同胞とも故郷とも。明白ふい告ざり
 が。廿年と經て今こふ。終ふ脱身ぬ身の惡業。古主の爲に捨る命の。何惜むべた。あうにあ
 れ。子ゆゑの闇に夜乃鶴。彼笛竹乃音を聞くふも。嘆いやます哀別。離苦。是も又道孝主。木綿
 妙どの。値偶乃恩役をと思へば。あうく。喜く侍る。とかき口説。苦痛はいと。演
 鮮血ながら乃涙なり。かくい告次も。浦二郎も。女乃心を思ひ涙。何といの間の苦清水。細る計
 比玉の緒を。業もどめぬ終焉ふ。や。後まぐと清繩の。告次は對て。屏と扇。己れ昨夜御邊ふ
 追れたる時。潛ふ是を相されば。御邊遠からせ。鎌倉小歸る事あり。ま。不慮の厄難あり。是と
 避る事甚難。只八の弓人ともて。是ふ換なば。其禍を脱脱との。ま。却不思議の功
 と。つべし。此事豫て。浦二郎に教く。其意と得さ。たれば。彼密に云あるべし。又己が龍神

より傳受せし一卷と傳んもの。御邊の外はありとも覺えず。今面あさり授んとすれば。朝敵
 たる清繩が手より物と受るの傍難と厭ふあらん。よりに此一卷を。浦二郎にとらるる。速
 に兄は贈りて。孝悌を全せよ。といひうけて。彼一卷と搔廻。さし出す腕定めなく。手首ぬ
 るへる手負の苦惱。浦二郎とつ。押裁た。斯まで義理を思ひ給ひ。おどて鎌倉へ降参し。後
 榮次計り給ひざる。といひせも。米す暇と睥。うの何と云こと。始ありて終なれた。大丈夫の
 所爲は非ず。いざ告次。首とつ。實政の實檢に備よ。といひつ。刀と引まいせば。門なる筈と
 忽地は吹止めて。高やう。鎌倉よりかん使。と呼門聲に。告次の。豫猶あうひて。閃うす刀の下
 は牛淵が。首に膝下に撲地と落。共は倒る。玉島が。刀と抜。息絶さ。告次の。目と押。抜。ひ。刀
 とおさめて。牛淵が。首級と頭巾に。楚と押。張。注目され。浦二郎の。走り出。折戸と開く。思
 ひもかけず。博多倍太郎。從者僅に二三人と將て。横笛と雄手に。あつ。馳。進み入。上。坐。ま
 押さほり。吉次に對て。云やう。時宗朝臣火急の召よ。よつて。御使と承り。夜と日。繼て。今。曉
 到着。鶴。實政ぬ。に。調。して。牛淵没落の事と聞。御邊の迹を追ふて。こ。に。来。れる。折。も

屋の上は雲氣あり。事の爲射最怪しけきむ。旅中の徒然を慰んとて。携るる笛を吹く。試る
は。瀧龍庭より升て。雲に入る形の如し。當は是牛淵が隱家なめりと猜し。まづ外面より立
り。裡の容子を張へば。牛淵既し誅伏す。皆是御邊の計策より出く。其功最稱讃するは堪
り。執權恩賜の錦の直垂。内室秋布の消息。こゝろあり。受おさめて倍太郎と共に。鎌倉へ参り
給ふべし。と説示せば。吉次の謹めて主命を承りて。速米の賜と拜受し。又秋布が書翰と
受とす。さう云やう。俄頃し鎌倉へ召かへさる事。未ど其是非と思ひ已死まへむと雖も。君
恩斯迄ふ深々れば。あゝ死筋ふのあるべうらむ。まうりとも全く朝敵を責滅し。九州と掃
淨せし。鎌倉へ歸らん。最本意を死所爲かれど。固辭奉るよよしあり。こゝろ廿年米速
離るる。實母玉嶋小環會あがら。彼義は仗し自害し。伏んぬ。せめて野邊送の營と致をま
で。まはしの暇と置き給へり。と希ふ。倍太郎聞て。かむりり此事の仔細及びむ。然
らば己れの矢田に退れ待たむ。心。徐は葬と。な果さまへ。と應つ。知ども死ぬるも
ちし。徐々と立ち歸り行。折目正し。死長袴の下括さへ。武士の毛。脇吹まる。雪風。路次の
疲勞と勤めて。式待りて。目送ぬ。

作者云前編三冊稿成。まづ刊行を。こゝに述る所稍央ふ過す。是より以下瀬川采女
鎌倉に赴く中途。殃危にあふ。及び瀬川浦二郎が傳博多彌四郎諺死の辨。若黨俊
平兼七が始終。秋布が艱難苦節。終は仇人鼠川嘉二郎。長城野兵太と撃く。名を海内
高し。其後俳優瀬川路考。采女夫婦が忠節心烈と。英才伶俐と。景慕し。瀬川と号し。濱村屋
と家稱せし事の終まで。後編に著すべし。



松浦佐用媛石魂録前編下巻終

